

## ■若手に読んでもらいたい本

西見大成のおすすめ  
人工合成化学プロセス技術研究組合 技術部長



分野：工業全般  
書籍名：新・拒絶理由通知との対話  
著者名：稲葉慶和  
出版社：エイバックズーム  
出版年：2006年(2014年に第2版刊行)  
価格：3,800円(税別)

20年ほど前に私が企業で研究開発を始めたとき、最も戸惑ったのが「特許」の書き方だった。オリジナリティに自信のある研究内容を基に特許出願し、審査請求を行うと、「当業者が容易に想到し得た」「通常の知識を有する者が容易に発明をすることができた」等の失礼極まりない文言が書かれた「拒絶理由通知」が送られて来る。「審査官は、いったい何様のつもりなんだ」と頭にきながら補正し、やっとのことで特許査定となる(場合によっては、拒絶査定となってしまう)。同様な体験を重ねることで、特許に対してアレルギーをもったアカデミアの研究者も多いのではないだろうか。

本書は、元審査官の方が、具体的なエピソードを基にしながら、拒絶理由通知のそっけない表現の裏にあるメッセージを丁寧に解説したうえで、「すべての引用例のどこにもない本願発明(この願書に書かれた発明という意味)だけの要件とそれによる顕著な効果」が特許査定のために必須で

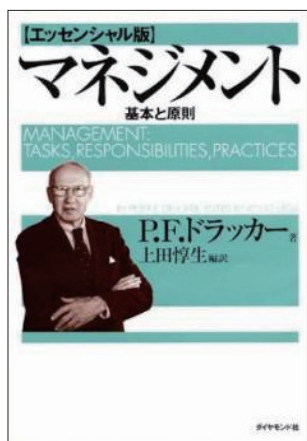
あることを教えてくれる。筆者は本書を何度も読み返した後、拒絶査定となりかかっていた(なってしまった)重要特許を何件も成立させることに成功し、「もっと早く本書を読んでいれば」と思ったものである。



知財立国を目指す日本では、研究成果を特許により権利化することが、これまで以上に重要となっている。本書が、企業のみならずアカデミアの研究者にとっても、特許が身近なものに感じられる(アレルギーが緩和される)きっかけになれば、と期待している。

## ■私の役に立った本

酒井崇匡のおすすめ  
東京大学大学院工学研究科 准教授



分野：社会科学  
書籍名：マネジメント [エッセンシャル版] 基本と原則  
著者名：P.F. ドラッカー  
出版社：ダイヤモンド社  
出版年：2001年  
価格：2,000円(税別)

若手研究者は、学生さんと教授の先生の間にいる中間管理職的な立場であるような気がします。ある意味では、研究室をマネジメントする立場にいるわけで、某女子マネージャーが読んだ少し後に、(つられて)私も読みました。まず衝撃を受けたのは、企業の目的は利益を上げることではないという点です。企業は社会の機関であり、企業活動を通じて、社会の欲求を満たしたり、従業員の自己実現をはかったりすることがその目的であるとドラッカーは言います。こうなると、企業を研究室、従業員を学生・スタッフと読み替えても、違和感がない気がします(実は、学生は顧客だったりするわけですが)。以下、興味深いトピックについて、研究への読み替え(太字)を交えていくつかご紹介します。

意思決定は、組織のあらゆる階層において行われている。トップマネジメントは『自らの事業はなにか? なんてあるべき

か?』を定義し、周知する必要がある。研究室の目的を明確化して、学生さんと共有し、判断材料を与えるべき。そしてそれを常に問い続けなくてはならない。

大きな成功をもたらした事業もせいぜい10年で陳腐化する。流行のトピックも、もしかすると10年後には……むしろ、自らで陳腐化させるべきか。

最後に、一番心に刺さったトピック。企業は、大きくなる必要はないが、常に良くならなければならない。予算規模や学生の増加だけではなく、適正な規模の良い研究室をいつかは作りたいと思います。興味のある方、是非マネジメント論議に花を咲かせましょう。

